学生街を歩く ⑨

◆早稲田（東京都新宿区）

読売新聞記者　中西　茂

JR山手線高田馬場駅から早稲田大学に向かう早稲田通りは、神田と並ぶ昔からの古書店街だが、最近目立つのはラーメン店である。少なく見積もっても二〇店以上。入れ替わりも激しいようで、まさに戦場の様相を呈している。

この通りにある早稲田松竹は、都内でも数少なくなった名画座だ。かつて、高田馬場周辺には、座布団敷きのミニシアターも含めて五軒の映画館があった。最後の一館となった早稲田松竹も二〇〇二年四月から休館となったが、その年の暮れに営業を再開した。その後押しをした早大生が、社会科学部で都市計画のゼミに所属、映画好きでもあった沼田真一さん（三二）だ。仲間に声をかけて署名を集め、古書店との連携や会員システムの導入など、経営改善計画も提案した。

休館時には学生たちが動いた名画座「早稲田松竹」

学生街にありながら、意外に大学との関係が薄かった早稲田松竹だが、復活後は、早稲田大学芸術学校の学生の作品を上映するといった取り組みも行われている。

早稲田通りの西早稲田交差点から大学の本部キャンパスに入る小道が早大西門通りだ。「三品食堂」の北上昌夫さん（六四）を訪ねた。現在、早大周辺商店連合会の会長である。地元育ちで、父の代は元々、学帽や襟章を扱う商売をしていた。移転を機に一九六五年に転業、北上さん自身は約二〇年間のサラリーマン生活を経て店に入った。

「三品」とは牛めしとトンカツとカレー。創業時は別々のメニューだったが、学生の要望に応じて三つを組み合わせることで、「カツ牛」、「カツミックス」（カツ牛＋カレー）、

「三品」とは言ってもメニューは30種類以上

「あいがけ」（牛めし+カレー）などのメニューが生まれていった。大盛、赤（超大盛）、玉子入りがあるため、「三品」と言ってもメニューは三〇種類以上。店に入るなり「カツ玉！」（牛めしにカツと生玉子乗せ）と、ひと言で注文するのが通だ。壁は運動部系のペナントや色紙で埋まるが、映画サークルにいた筆者も在学中によく通った。くせになる味である。

連合会長ともなると学生の頼み事も多い。昨年十二月にも、学生が「もちつきをやりたい」という話を持ち込み、他の店を借り切る形で、留学生も含めた百人近い学生や地域の人たちが師走のひとときを過ごした。「先生に、三品の親父に相談しろとでも言われたんでしょう」と北上さん。

早大南門通りは地下鉄早稲田駅に最も近い商店街だ。この通りの「早美舎」はコピー、製本、チラシやポスターなど、印刷関係の注文を一手に引き受ける。バンダナを巻いたひげおやじのイラストがトレードマークだ。開店は一九七二年。「うちができるまではみんな試験のときにノートを写すしかなかった。もうけさせてもらいましたよ」という社長の中島達欣（たつよし）さん（五九）も地元っ子である。B4一枚三五円（現在は七円）。いまから考えるとかなり高いが、当時の学生には、コピーはまさに革命だった。

いまでは、すぐ近くに二店舗目を開き、白黒コピー機だけでも一〇台以上備える繁盛ぶりだ。卒論の製本依頼に訪れる客の中には、他大学の学生もいる。サークルなどで使うTシャツやジャンパー、マグカップなどのノベルティグッズ、名簿やサークルの記念誌など「とにかく断らずに学生の要望に何でも応じてきた結果」が、いまのような多様なサービスになった。最新技術の導入やデザインセンスを磨くことに投資を惜しまずにきた自負もある。店先にさりげなく展示した写真の中で、中島さんは「愛してるぜ、早大生」と書いたボードを持っている。早稲田祭で流れたビデオに出たときのメッセージ。それは早大生に愛され続けてきた証しでもある。

最近、就職活動用に写真入り名刺を頼む学生が多いことに驚くという。留学生の増加もあって、海外で就活をするときに便利らしい。留学生に限らず、学生が自己アピール力を求められている時代であることは間違いない。

壁のポスターにあるバンダナ姿のイラストは中島さんがモデルだ